

あとがき

本書の副題は、「勇気づけの学級づくり・2」としました。前作の『先生のためのアドラー心理学 勇気づけの学級づくり』（ほんの森出版、二〇一〇年一月）の続編という位置づけになります。ずっと書きたいと思っていたアドラー心理学のことを思い切り書いたつもりでしたが、いざ書き上げてみると「もっと書きたい」ことが出てきたことも本当のところでした。今回この続編を書くことができたことで、やり残したことをやり遂げた気持ちです。

子どもたちがなかなか挑戦しなくなつたと言われます。失敗に弱く、うまくいかないと投げ出してしまつたり、挑戦そのものをしなくなつてきているという指摘もあります。これはとてももつたいないことで、挑戦しないということは自ら成長の機会を捨ててしまうことになります。

なぜならば、私たちは挑戦の繰り返しによっていろいろなことができるようになったからです。言葉を発することだって、歩くことだって、人と遊ぶことだって、みんな挑戦をしてきたからできるようになったのです。子どもにかかわる者にとって、子どもをやる気

にさせること、つまり子どもが挑戦できるように励まし、勇気づけることは、極めて大事な力だと思えます。

では、どうしたら子どもがやる気になるのかと考えていったときに、「安心感」というキーワードに出会いました。子どもを勇気づけるためには、安心感その土台として必要だと気づいたわけです。しかし同時に、相手に安心感を持たせ勇気づけるとときに、「自分はどうなのだ？」という問いも生まれました。自分が安心していなくて子どもを安心させることができるのか。自分が教室で安心していなくて、子どもを勇気づけられるわけがありません。

そう考えたときに次のキーワードが出てくるわけです。それが「使い慣れた技」。新しい技もけっこうですが、よく聞かれるありふれた技術を私たちが使いこなしているかという、そうではないでしょう。使い慣れた技術には、実家の定番料理のような安心感があり、その安心感がそれを使う教師に自信を与えます。先生が自信を持って教育活動をするからこそ、子どもは安心して学ぶことができます。

先生の安心感が教室の安心感をつくります。成長には失敗体験が必要ですが、安心感のない教室では、子どもはつまづくことができません。また、安心感があれば、思い切り転んでも、立ち直ることができます。

本書に紹介した教育技術や技法に限らず、先生方が自信のある方法で、ぜひ教室に安心感をつくりだしていただきたいと思っています。そのために本書が何らかのお役に立てば

光栄です。

本書の執筆期間は忙しい毎日でしたが、過密スケジュールの中をなんとかやりくりできたのは、わが研究室のメンバーが様々な場面でサポートしてくれたからです。また、ほんの森出版の兼弘陽子さんからは、混沌としたアイデアをいつも整理していただき、なかなか進まない作業にも粘り強くあたったかい励ましをいただきました。みなさんから安心感をいただき、やる気にさせていただきました。心からお礼を申し上げます。

二〇一〇年十一月

赤坂 真二